

# 人文会ニュース

1988.5

ゼーんぶん私たちの宣伝です

……………リブロ渋谷店 田口久美子 1

私設「図書館の七不思議」……………黒田一之 6

人文書講座XV

プロト = モダニズムの言語学

比較言語学と悉曇……………竹内信夫 13

出版販売の裏街道……………村上信明 24

新・人文書セットについて

……………東京大学出版会 竹内康一 26

51

業務用

〔現代政治学叢書〕1 全20巻刊行開始! ★内容見本呈

# 国家と社会

猪口孝 四六判/1800円

「国家と社会」の哲学的基礎から脱き起し、支配装置の肥大化と負荷過重、大衆参加の拡大と儀式化という現代国家の逆説を解明するユニークな現代日本政治論。

# 儀 礼

青木保・黒田悦子編 四六判/2600円

世界のさまざまな民族の儀礼の諸相をいさゝかといはえながら儀礼の機能・構造・意味について考察を深め、儀礼論の検討に及ぶ。

# 離婚の法社会学

利谷信義・江守五夫・稲本洋之助編 四六判/2600円

「欧米と日本」離婚は、家族の崩壊か、新たな出発か? 世界的に激増する離婚の実態と法制を分析。A5判/5200円

東京大学出版会

113 東京都文京区本郷7 ☎03-811-8814

# ◆現代青年の全人格的理解と、より適切な指導のために 青年心理学ハンドブック

西平直喜・久世敏雄編

〈内容見本呈〉A5判/函入上製 一二四〇頁/定価一八〇〇〇円

心理学、教育学、精神医学の第一線の専門家が、あらゆる角度から現代の青年像に接近し、彼らのトータルな理解と適切な指導指針を示す必備の一冊。

小川一夫編著

四六判/定価一八〇〇円

# くらしの社会心理学

福村出版

東京・文京・小石川1-3-17 電(813)3981 振東9-78313

# HUMAN RIGHTS

B 5判 1300円

D・セルピイ著 宮崎繁樹・江橋崇・横田耕一ほか訳

世界人権宣言からちょうど四〇年を迎えるが、国家による人権侵害・差別は世界のいたるところで人間の尊厳を脅している。本書は気鋭の政治学者による「ドキュメンタリー世界人権白書」である。写真・イラスト75点収録。

# 水俣病にまなぶ旅

A 5判 2600円

原田正純著——水俣病のまえに水俣病はなかった

〒170 東京都豊島区南大塚3-10-10 日本評論社

# 王妃エレアノール

石井美樹子

ふたつの国の王妃となった女  
イギリスとフランスの二国の王妃となり、「姦婦」と罵倒され、また讃美の声を注がれた女の物語。●定価2,000円

# アルザスのユダヤ人

パウル・アサール/訳 宇京早苗

フランスとドイツの国境地帯にあるアルザス地方に生きた〈少数者〉ユダヤ人の歴史を語る。●定価2,500円

平凡社 〒102 東京都千代田区三番町5 振替・東京8-29639 ☎03-265-0455

# ぜーんぶ私たちの宣伝です

リブロ渋谷店 田口久美子

「人文会」と書くともカタクなくなってしまおう。十年程前に開店した船橋店に転動した当時、「ちゃんとしたイベント」をやりたいと、人文会にお願いしたという過去をひききっているからだと思う。池袋店から転動してきた私には、人文会＝権威という図式がすっかり頭に入っていたようだ。今でも引ききっているのだろう、まるで戦後リベラリズムのようではないか。ニューアカだのニューサイエンスだの種々の波にのまれながら、この十数年、

人文書は変遷を重ねてきた。私も池袋、船橋、渋谷と場所を移しながら人文の棚とつきあってきた。現在はロフトの五階に移ったが、以前のB館地下一階の三十坪程度の規模の時も、人文書の表面をカスった位かもしれないが、棚を確保した。本当に人間にとって最初の教育ってしぶとく身体に残るものだ——と苦笑いをしてしまおう。「ロフト」は昨年の十一月に、「雑貨を超える雑貨館」というキャッチフレーズでオープンした。基本的に客層

は変らないだろうと判断した。どうしても「ロフト」自体の動員力を低く見積りすぎていたようだ。雑貨にこだわっているのは、十代から二十代だと判断したのが間違っていたようだ。もちろんこの年代が一番多いが、思ったより三十代の客層が多い。三種類のパターンに分れるようだ。一つは、「渋谷」を買いに電車に乗ってくる客層。二つは、「渋谷」近辺のビジネス客。三つは、連続と続いている「西武」の客層。最初の「渋谷」を買いにというのが、私から見ると実に不思議だ。そんなものはどこにもないし、あったら叩いてやりたいと思う。でも現実には「あるように見える」のが私たちの仕事になっている。幻想としての「街」の魔力だろうか。こうした客層に対してわずか五十坪の書店で対応するには、余りにも私たちは力不足だ。大体書店は商品量が勝負である。どこにどんな本が陳列してあるか知りつくしている大型書店、学参、理工書、経済書、児童書、コミック、雑誌と幅広い年齢層に対応でき、しかも静かで、ゆっくりできる、これにまさるものがあるだろうか。私から見ると二百坪以上の店で働いている書店員は垂涎の的だ。——とこんなことを書いても始まらない。私たちには私たち

なりの道が開けてもいいはずだ。もし私が船橋から直接ロフトに来たなら、新刊中心の書店への道を行ったと思う。「新しいものへ」とお客さんは傾くと判断しただろう。三年間地下一階でじっと客層を見て思ったことは、「若い人」というのは意外に古典的だということだった。それに新刊に飛びつくほど、既刊本を読んでいる。棚の作り方によっては、ロングセラーが新鮮に見えるはずだ。加えて新刊も発行されて一ヶ月もたてば既刊本だし、評価の定まったロングセラーには勝てない。それに新刊中心型の書店の弱点は、棚が背景になりがちだということとで、これはどんな書店でも克服できない。常に新刊を切らさずに揃えておくことに狂奔していると、棚まで目がいかない。それでもわずか五十坪の店をロングセラー店舗、しかも雑誌も少し、コミックなし、児童書は大人向け絵本のみ、学参なし、にしたのは大胆だったかもしれない。——答えはまだでないが——。

各国別の棚を作った。アメリカのブロックが一つ、西欧とA A諸国で一つになった。本当は、全部ここにすべてのジャンルを分けて入れたかったが、日本の思想書は西欧系の翻訳が非常に多く、アメリカ、A A諸国とのバ

ランスがとれなくなってしまう。結局各国別の棚は、文学と社会、歴史、ルポルタージュが中心でスタートした。思想書はそれだけで別のブロックにした。半年経ってみると面白いことに、アメリカは文学が中心とはいえず、社会、歴史、ルポルタージュ、とスタート時と余り変らない配分で残っているのに、西欧系は文学が圧倒的、AA系は社会、ルポ関係が圧倒的という配分に変っていった。もともとの出版されているジャンル地図がより強く表われているようだ。もっとも中南米文学は大変頑張っているが。日本の文芸作家は数を限って文庫本を入れこんだので、この各国別の棚もそれを生かしたと思った。どうも私たちの力不足のせいかな、管理面が難しく歯切れが悪くなるようだ。

例えばみず書房の『チーズとうじ虫』という本がある。イギリスの棚に入っているが、もう一ヶ所、「アート」(この店では、芸術、建築からロック、歌舞伎まで)の棚に置いた。なぜアートの棚に置いたかという点、単なる美術画集の棚に終らせたくなかったのも、美術を生み出した歴史的背景ということで、中世の棚を作った。不思議なことにイギリスの棚よりアートの方でこの本が

売れる。もう一つ面白いことに、「単なる美術画集の棚で終らせたくない」と考えて作った「アート」の棚に、単なる美術画集がほとんど入っていないという結果になってしまった。つまり何だかよく分らないが、関係あるといえは、「そうかなあ」と思える本が我が「アート」の棚を作っている。

もう一つ例をあげれば、竹内書店の『反解釈』は、「アメリカ」の棚、「アート」の棚、そして「思想」の棚にある。ここまで置いていると、担当者は自分の棚から売れたのか、他の担当者の棚で売れたのか良く分からなくなる。補充も一つ一つ確認しないとやっていけない。納品時に各担当者別に分ける時も混乱をきたす。打刻コードをスリップに書く人、マジックをぬる人、はしこを押す人とさまざまになる。気の弱い人、めんどくさがりやの人は自分の棚の本が、みるみるうちにガタガタになる。

先日オートバイの実用書の棚を見ていたら、『マルドロールの歌』があった。さすがの私も目をむいて、ムムムこれは何だ! と叫んだ。担当者に言わせると、「風が吹くとオケ屋がモウかる」風につながる。理路整然とい

うのだろうか、これを、と私は思った。思ったけれど「あんまりだ」という理性に従ってひっこめた。顧客と棚造りをする人間との、ある程度の「共同幻想」は必要ではないだろうか。

「共同幻想」といえば書店員は「棚」を通して、客と対話をしているのではないだろうか。現在の大部分の書店が取っている「棚造り」は、書店の歴史に裏づけられた納得性を十分に持っている。お客さんは書店に入れば、この歴史性に裏づけられたジャンル分けに従って本を探ります。新刊を見ているとつくづく思うが、自分たちの棚に合わない本は、返品するという悪癖は悪習といってもいいぐらいに、身につけてしまっている。だからといって私たちが作った棚が「現在」に適應しているか、というところでもない——と私は素直に思っている。結局「はみだしてしまふ本」というのは、どんな棚に置いても必ずずはみ出してしまふ。正しい棚などというのはいえなない。開店当初、五十代位の男性客に、「ここで随筆の本はどこにありますか？」と尋ねられた。うーん「随筆」、エッセイではなく？ はい、ちゃんとした随筆です。例えば？ はい、ちゃんとした随筆です。こうなると「す

みません、当店には置いておりません」となってしまう。何だったろうちゃんとした随筆って？ 文芸の棚は確かにあって、エッセイも入れている。「これではない！」と断言されると、私は混乱してしまふ。

「藍青、ある？」

「すみません、当店では御注文だけになります」

「あっそう」

四十代位のパンチパーマの男性客は、簡単に引き下った。

小一時間位たったろうか、その客がどさっとカウンターに本をつみ上げた。『欲望の修辞学』『麻薬常習者の手記』『汝の父を敬え』『ジャンキー』『監獄の誕生』ときた。これは何だ！ よく集めたと思つた。断わっておくが、いくら私たちの棚がジャンル・クロスオーバーをしているとはいへ、いくらなんでもこれ程は一ヶ所もない。ちなみに最初の「藍青」は刺青の写真集である。

こうやってみると「共同幻想」って何だろうか。書店員、顧客相互の了解事項はどこでいくい違ふのだろうか。

歴史性に裏うちされたジャンル分けを取らないとする、一冊の本を探るのが大変だ。非常に分りにくいと、

お客さんから言われる。そういうお客さんは聞いて下さい、私たちに。時には三方から「はい、あります！」と三重唱が聞こえるかもしれない。うなだれている場合の方が多ですが——。何といっても五十坪しかありません。

「専門書店ですか？」

と時々聞かれる。専門書店ではない。何故なら何一つ完璧に揃っているジャンルはないから。しいていえば我が店は「客層」の専門店かもしれない。当初は二十代ターゲットの。今は、二十代から三十代にかけての。いやそれも違う。何故ならフリーで、たまたま立ち寄ったお客さんの買い上げ比率が高いから。

### ■松岡正剛

山口昌男・吉本隆明・荒俣宏・テリダ・ケージ・イエイツ・マンディアアルグなど内外の論客10名と、世界的視野のもとに日本文化の姿と構造を縦横に論じる刺激的対談集。2900円

# 間と世界劇場

主と客の  
構造 ②

私たちは、歴史に裏づけられたジャンル分けをしていない、共同幻想といってもよく掴めていない、あらゆる年代に対応できているわけでもない。「ロフト」の動員を天の助けに遊んでいるのかもしれない。もっとも、これは遊びといってもかなり真剣に遊んでいるつもりだ。

書店員の待遇の悪さは周知の事実だが、こんなふうにして面白さを見つけることが、生きがいになって書店員を続けていられるということもありえるし、実際楽しんでる書店員をたくさん知っている。

渋谷という繁華街に支えられている、私たちの好条件を片目でにらみながら、もっともっと面白い本屋を創っていききたい。お客さんも面白がってくれる、かな？。

## 英知の教育

■J・クリシュナムルティ「大野純」訳  
混乱・暴力・腐敗に満ちた世界で  
迎合せず逃避せず英知と愛を貫き  
うる。真に新しい人間をいかに育  
むか。魂の教育論。1400円

## 人間と死

6月刊

吉本隆明「死の構造」/竹田  
青嗣「現代社会と死」/芹沢  
俊介「家族と死」/菅谷規矩雄  
「言葉と死」他 (予)1400円

### 春秋社

101東京千代田区外神田2-18-6  
☎255-9611 振替東京8-24861

# 私説 「図書館の七不思議」

黒田 一之

ある夜テレビを見ていたら、国会の予算委員会で、不公平税制の是正問題を取りあげ、「税金七不思議」と銘うって、政府に迫っている議員が映っていた。

古今東西を問わず、何かなぞめいたこと、常識では納得のゆかないことがあると、これを聖なる数である七つまとめてうんぬんする風習がある。三つでも五つでもなく、また八つでも十でもない、必ず七つ集めるととたんに何やら説得力をもってくるようである。

とりわけ図書館のように、古い歴史と長い伝統をもつものは、その旧習墨守の体質の中に違和感を持つ人が出

てくる。すでに、私の知っているだけでも、「図書館の七不思議」と題するものを発表された方が三人もおられるのもそんなわけからだろう。それらにならないながら、私もまた七不思議をあげてみることにした。

自説を述べる前に、一応前記の方々の説を簡略に紹介させてもらう。

まず第一は、浪江虔氏のもの。五十余年にわたって、東京近郊の農村地区で私立の図書館を運営しておられるが、その体験の中から、同じく私立の佼成図書館の発行する、「佼成圖書通信」のいう館報（隔月刊）に、一九

六八年の二一号から翌年の二七号まで、連載発表された「図書館界の七ふしぎ」がある。項目を列挙すると、

- ① 箱とカバーの追いはぎ
- ② ラベルは暴君である
- ③ 毎週一回の出頭命令
- ④ 利用者は取締りの対象
- ⑤ 官尊民卑を保存する図書館
- ⑥ 団体貸出しはこれでいいのか
- ⑦ みごとな抵抗精神

①と②は図書館の蔵書がすべてケースやカバーをはがされた上、背文字の上にもラベルを貼られていることへの怒り。利用よりも保存に重点がおかれて、いわゆる閉架式であった時代の旧習が、閉架式になった後も温存され、疑われることなくつづいていた。

③は貸出の冊数や期間の制限が、多くの場合一冊一週間となっており、全く一方的な管理本位であった。まるで刑余者に対する保護監察のようにも見えたのであろうか。

④は図書館の条例や規則の中にみられる旧憲法時代の

遺制ともいうべき人権無視の条文のかずかず。これは⑤においても歴然で、たとえば寄付しようとする者に「寄付採納願」を出させるといった戦前のしきたりが改められていない実状の指摘。

さらに⑥はサービス活動のなかにも戦前の恩惠的、啓蒙的な思想が残存していることをあげ、制度の見直しを訴えている。そして⑦はすべてがPRの時代になっているのに、これを怠って旧態依然としてお役所的安閑さの中に鎮座していることへの警鐘であった。

ひとつひとつの引例傍証が的確だから、反論の余地もなかった。実際、その後の二十年間にかなり改善されたのは、浪江氏の発言が時宜を得ていたからだろう。

二番目に「短期大学図書館研究」の二号に東京大学情報図書館学研究センターの井上如氏が発表されたものがある。しかし、氏の論稿は図書館のさまざまな実務を、内部から再点検し、疑問点を指摘されたもので、公共図書館一般に通じるものとは若干距離があると思うので、ここでは特にふれないでおく。

さて去年の読書週間に、鳥取市で「本の国体」と称されたイベントがあった。これをとりあげたNHKテレビ

の中で、山口県徳山市のマツノ書店主、松村久氏が「図書館の七不思議」を述べられていた。これは一九八三年の一〇月に山口市で開かれた全国図書館大会の「出版流通と図書館」の分科会で、「山口県の図書館七不思議」として意見発表されたものを、いくらか修正をされながら、あらためて電波を通じて訴えられたのだろう。

実は「図書館雑誌」の一九七一年一月号に、「驚異的な街の図書館へマツノ読書会を現地に見るⅤ」という一文が載っている。図書館の貸出業務が何よりも最優先として、ようやく軌道にのりかかった頃のことであった。たまたま徳山市で貸本屋をしながら、市民の間に街の図書館の役割をはたしている存在があった。貸出を重要視する動きに、古い図書館観の持主からは、「無料貸本屋」という悪罵が出たけれども、なあと図書館は貸本屋でさえなかったのだ。それほどにこのルポは衝撃的であったといえる。そのマツノ書店が、いまはローカル出版社に転身し、地域文化の発掘に懸命である。おもしろいことに、このルポを書いたのが、先の浪江氏であった。

松村氏の七つは次の通り。

① (図書館員は)なぜ本屋へ直接購入に行かないのか。

か。

② なぜ「即日貸出」ができないのか。

③ なぜ(書架に)「死んだ本」がいつまでもあるのか。

④ なぜ郷土誌は禁帯出が多いのか。

⑤ なぜマンガ、雑誌、文庫本が少ないのか。

⑥ なぜヤングが寄りつかないのか。

⑦ なぜ広域ネットワークができないのか。

この詳細は「出版ニュース」の一九八三年一月下旬号を見ていただくとして、図書館界独自の隠語めいたもの一つ二つは説明を必要とするだろう。②の「即日貸出」というのは、手つづきをしたその日から借りることが出来る仕組み。貸出申込みをした人が記載した住所に居住していることを確認するために、その宛名へハガキを郵送し、届いたら持参させる。出たらめならば届かないと判断していたのだ。④の「禁帯出」とは貸出できない本のこと。そんなラベルも貼られていた。

前述の通り、松村氏は地域を「山口県の……」とことわって問題提起された。山口県は、すくなくとも戦前は図書館設置率の高いことなど、いわば先進県だったといえる。

だが戦後の地盤沈下で、かなり後れをとっていた。そんな中でのむしろ遠慮深い、つまりは山口県という地域的な「管見」として発表されたものと思われる。

ところが、発表に対する図書館の側からのまともな回答はほとんど寄せられなかったし、図書館大会で出版流通の分科会も開かれなくなってしまっている。結局、表立って松村氏に受け答えする人はいままでに、四年目の去年のテレビでの発言となったのではないか。

しかし実際には、松村氏の七項目の批判は受けとめられていたようだ。若く創意に充ちた図書館員たちは、業務改革を進め、②や③はどこでもほとんど克服したし、①④⑤も改善の工夫がされるようになった。また⑥について研究討議がされ、専用のコーナーを設けたり、関係リストを作成配布したりするなどの実践報告もされている。最後の⑦は地域的な進捗の差は著しいし、まだまだ遅々とした歩みではあるが、確実にその実現の方向に進んでいるといえよう。つまり松村氏の提言を受け入れる素地があったということである。

長くなってしまったが、以上のことを前提として以下の私説、四番目になる七不思議をお聞き願いたい。

#### ① 月末休館と図書館記念日

戦前の図書館は、日曜日も祝祭日も開いているのが普通だった。上野の旧帝国図書館にならって、ただ一日、月末だけは休館して、書架の整理や業務の打合せなどをしてきた。職員それぞれが休日を異にしていたし、時差勤務もあったから、全員が顔を合せるのはこの日だけであった。だからそれだけの意義もあったといえる。

しかし戦後は週休制が定着し、国民の祝日も休館にしているのが大半である。月末を特に休館にする必要性はほとんど失われている。百歩ゆずって、月一回の特別休館の日が必要だとしても、それが月末でなければならぬ理由は見当らない。しかも多くの図書館では月末が週一回の休日に当たると、その前日を月末として休館しているが、利用する側には納得しがたいことである。

ところで、四月の月末の三十日は、昭和二十四年のこの日に図書館法が公布された日だということで、昭和四十七年に図書館記念日と決めた。その大事な記念日を、決めた図書館が門を閉じているのだ。年一回の絶好のPRの日を、なぜ積極的に活用しないのだろうか。

#### ② 図書館用語の見直し

本来なら図書館法が制定された時に、当然古い図書館用語の改廃がなされなければならなかった。本稿ですで使用している「貸出」なども言い替えるべき言葉の一つであろう。松村氏の④の「禁帯出」なども皮肉っぽく使われたと察する。「閲覧」とか民間蔵書の「買上」とか、戦前の権威主義の悪臭がただよっている言葉。他にも図書館用語と限定できないが、「読み聞かせ」などは学校教育の方の「落ちこぼれ」や「非行」（警察用語）に通じる管理中心の用語で、あたたかさに欠ける。そこで「レファレンス」や「ストーリーテリング」といったカタカナ語が、外来語としても認知されなままになつていのではないか。いたずらに言葉狩りをせよというのではない。古い思想の中で作られ、使われて来た言葉から脱却し、イメージアップをはかれないといけないのだ。

### ③ 再販制度を守れ

出版界では、版元も流通業者も小売書店も一致して、再販制度の維持に協力してきた。図書館界でも表面的には賛成しているが、内実はどうだろうか。今でも公然と歩引き購入を主張する人が絶えない。その多くは役所を転々として来た人であり、法を守るべき立場にある公務

員である。弱い立場にある小売業者は、なかなか図書館側の無法な要求を拒否できないでいる。すでに私は何度かこのことについて訴えてきたのであるが、事態はますますひどくなつてきているようだ。図書館員がみずから制定した「図書館員の倫理綱領」には、その第十二条に次のようにうたっている。「図書館員は、読者の立場に立つて出版文化の発展に寄与するようにつとめる」と。ならば、問題の所在を長い目で認識し、ただちに業者いじめをやめるべきである。また大手業者の、抜け駆け的違反行為と対決すべき時に来ていると思う。

### ④ 寄贈依頼もほどほどに

浪江氏も松村氏も、図書館にまだ残っている官尊民卑の思想を指摘されていた。その一つのあらわれといえるが、それにしても苦労して刊行した者に無償で寄越せとよくも言えるものである。あらかじめ印刷された書類だから各所に出し、それに応じるところもあるのだろう。文面の中に、永久に保存してやるのだから有難く思えといわんばかりの字句が並んでいたりする。元来は市販されない出版物についてのみ、送料は負担するからと依頼していたのではなかったか。いつの間にか商業出版物に

まで及ぼしているが、もし行革がらみのことだとすれば  
とんでもないことだ。

⑤ 外部講師への冷遇

ある新聞社に、図書館の諸問題に深い関心を持ち、多  
角的な見地からするどい記事を連載している記者があっ  
た。ある時、図書館の公的な集会があり、パネリストの  
一人として招かれた。他のパネリストは現職の図書館員  
と図書館学担当の大学講師、それに住民運動で図書館設  
置をすすめている主婦であった。普通の常識からいって  
こんな場合、薄謝のほかに旅費と宿泊の経費は主催者側  
で負担するものである。それなのにかねがね取材に協力  
してきたことを口実に、アゴとアシは自費負担だったと  
いうのである。大学講師も主婦も同様だし、公費出張の  
現職氏はもちろんのことだった。「わずかなお礼しか出  
せませんが」といつてきて、それを承諾したのだから、  
「薄謝は覚悟していたが、まさかあとは自弁なんて、図  
書館では常識なんですかね」とこぼしていた。こうした  
非礼は表に出されないから、もっとひどい冷遇もあるの  
かもしれない。金銭にかかわることで、信頼を失うのは  
ほんとはばかげたことだと思わないのだろうか。

⑥ 書評家としての図書館員

いま日刊紙の月曜版は、いずれも見開き二ページの書  
評欄を競い合っている。大量の新刊書の中から取り上げ  
られたのはほんのわずかで、広く目くばりして公平を期  
すために、各分野にわたる書評委員を外部に委嘱してい  
る。選択と評者の選定が委員の任務なのだろうが、当然  
ながら委員自身の執筆もある。それも匿名でなく、署名  
入りが増えてきた。だがその書評委員や評者に図書館員  
が加わっている例を聞かない。(但しなぜか家庭欄にし  
か掲載されない児童図書は別である)また担当記者の筆  
になると察せられる、出版情報や短文のニュースにめっ  
たに図書館そのものが取りあげられないようだ。英米で  
はブックレビューの担当には、多くの図書館司書が参画  
していると聞くが、日本の現状とは著しく遠い。それが  
図書館員の社会的な地位の低さ、図書館そのものに対す  
る世間の認識の少なさを意味しているとすれば、今  
後の変革に期待する以外にないが、それにしてもなぜもっ  
とみずからの職に自負を持って、強く主張してゆかない  
のだろうか。

⑦ 図書館員はもっと自腹で本を買え

本と、その本を求める人とをむすびつけるのが図書館員の仕事だといわれる。当然、本が好きでなければ勤まらないわけだ。ところが公費で買う本が目の前を次から次へと流れてゆくままに、それらはいつでも読みたい時に手にとれるような錯覚を持ってしまふ。また図書館の利用者にはどうぞ買う前にお借りになつたらと奨める。いきおい、自分が本のプロであることを忘れてしまふ。だがプロたる者は収入の何割かはみずからに投資しなければならぬ。つまり図書館員は自分の腹を痛めて本を買い、自分の血肉にしなければならぬのだ。ところがかつての自分も含めて、図書館員はあまりにも自前で本を買わなすぎるのではないか。最後は自戒の意をこめて図書館員よ、なせもつと本を買わないのかと警告してく。

以上が私の「図書館の七不思議」である。申しおくれ

てしまつたが、私は戦後まもなく学校を出て、神田の小さな出版社に四年ほどいた後、東京と仙台の図書館に十八年もいて、今は零細出版社の看板をかかげている者である。図書館にいた頃見えなかつたものが、やめたら見えるようになったような口ぶりをしているが、それもこれも図書館の仕事も出版の仕事も両方とも好きだからである。その二つがもつともつと相互に理解を深めてほしいと願っている。現状は両者の間に、あまりにも「暗くて深い河」がありすぎるように思う。この一文が、すこしでも相互理解の一助になつてもらえば幸いです。

黒田一之(くろだ・かずゆき)

一九二五年、大阪生まれ。早稲田大学文学部卒業。東京都

立日比谷図書館、仙台市民図書館を経て、現在、仙台文化

出版社代表。日本図書館協会出版流通対策委員会委員。

# プロト・モダニズムの言語学

—比較言語学と悉曇しつだん

竹内 信夫

言葉を使って互いの意思を疎通させたり、自分の思想や感情を表現したりすること、いやそれはかりか、言葉によって神とさえ交信できるということが、人間固有の能力であり、さらには人間という存在と表裏一体を成す神秘であるということの認識は、意外と古いものであるらしい。

紀元前一五〇〇年前後に、北インドに進入してきたアーリア民族の宗教賛歌リグヴェーダは、ホメロスの叙事詩と並んで、おそらく人間の言語学的実践のもっとも古い記録であろうが、そこには既に「ヴァーチユ」の名で

「ことば」が神格化され、その力が賞賛されている。ヴェーダの神々の多くは天然自然の現象を擬人化した人格神であるが、そうしたなかにあつて、このヴァーチユへの賛歌は言語に関する反省意識の最初の記録として貴重なものである。岩波文庫の『リグ・ヴェーダ讃歌』からその一部を引用してみよう。

「われは実に、一切万物を把握し、風のごとく吹きわたる。天のかなた、この地のかなたに、われは威力もてかくばかり「偉大」となりたり。」

ここに見られるのは何よりも、言葉が持つ不思議な威力を前にしての驚きと、その驚きから生まれる畏怖の念であろう。言語を記号の体系に還元し、その威力をほとんど記号学的機能にまで無化してしまった現代言語学の観点からすれば、それはまことに幼稚な言語観の反映と映るかもしれない。しかし、翻って、言葉のもつ不思議な力にまると捉えられて生きている人間日常の状態から考えてみれば、「われは実に、一切万物を把握し、風のごとく吹きわたる」という表現には、まことに実感がこもっている。

話は少し変わるが、わが国で弁才天と呼ばれ親しまれている神は、古くリグヴェーダに歌われた異国の神に由来するということはご存じだろうか。そのインドの神サラスヴァティーは、「水の流れに富む」という意味の形容詞の女性形である（だから弁才天も女神なのだ）が、元をただせば、水を人間に恵む水量豊かな河を人格化したものであるらしい（だから弁才天も多くの水の在るところに祀られている）。しかし、この河の女神サラスヴァティーはヴェーダ後期文献になると、ヴァーチュと同一

視され、文芸守護の神として崇拝されていたらしい。

他方、このサラスヴァティー女神は、ヒンドゥー教では宇宙精神の神格化たるブラフマンの妻とされている。言語の持つ創造的能力のまことに見事な神話表象といふべきだろう。世界が生まれて来るその発端で、既に、言語は豊かな産出能力を持つ女神の姿をもっていたのだ。言語に関する反省は、このサラスヴァティーヴァーチュ女神への敬虔な宗教的心情に始まる。

ここで一つ読者に質問を呈してみたい。「何でもよい、ある一つの言語に捧げられた著作で、もっとも完成されたものは何か？」というのがその質問であるが、そうきかれて、世界中の言語の星の数ほどもあるモノグラフィーのなかで、何の迷いもなく、パーニニの『アシュタールディヤヤーイー』を挙げる人がどれほどいるだろうか。

パーニニ？ 『アシュタールディヤヤーイー』だって？ 何、それは？ と、というのが大方の反応であろう。それもまことに当然至極のことであって、第一、パーニニはソシュールやチョムスキーほど知られた人物ではないし、その著作に至っては、専門家を除けば、知っている人は

まず皆無なのではあるまいか。

そこで以下、いささか事典風になるがパーニニについて一、二解説風の事を書いておくことにしたい。

パーニニは紀元前四、五世紀頃（プラトンとほぼ同時代である）に北インドのガンダーラ国、シャラートウラ村に生まれた文法家であり、当時上流階層の日常語であったサンスクリット語（パーニニ自身は「サンスクリット」とは言わず、ただ「パーシャー」つまり「言葉」とのみ呼ぶ）の語法を整理し、それをほぼ四千の、まるで代数の公式を思わせる簡潔な短句（スートラと呼ばれる）のなかに、たたみこんだ人である。この表現の簡潔さと記述の完全さは、現代に至るまで言語の記述として他に類を見ない。

日本でもよく知られた玄奘の『大唐西域記』にも、パーニニへの言及がある。

「……ウタクカカンダ城から西北へ行くこと二十余里でシャラートウラ村に至る。ここは『声名論』を作ったパーニニ仙が生まれた所である。……生まれ

ながらにして知はあらゆる物におよび、世の浅薄なことに心を痛めた。文字の誤ったものを削り煩雑な点を整理しようと思い、諸方に遊んで方法を問うていたところ自在天に会った。……仙人は教えを受けて退出した。そこでくわしく調べ深く考え多くの言葉を採集して字書を作りあげた。全部で千頌あり、一頌ごとに三二言である。古今を極め文字・語彙をすべて包括したものである。」（水谷真成氏の訳文を借りた）

こうして出来上がった「字書」（と言っても最初は書物の形をしていたわけではなく、口頭で伝承される章句の集成であった）こそが、二千年余の期間を経て現在われわれが手にする『アシユタアディヤーイー』（文字通りには「八巻よりなる書」つまり『八巻本』の意）なのである。

パーニニが記述の対象とした「パーシャー」は、現在われわれが普通に古典サンスクリット語と呼んでいる言語である。日本では長い間、梵語と呼ばれていた。この言語の上に、東洋全体を覆うインド古典文化が花開くこ

とになる。この書物はその精緻を極めた記述であり、後にその規範となったものである。現行のサンスクリット語文典はどれも、多かれ少なかれ、この書物に依っている。

ところで日本でサンスクリット語を学習するのは、ほぼ仏教学者に限られているが、これはそろそろ改められてもよいのではないかと思う。サンスクリット語で書かれた、読むに値する書物は、何も、仏典に限られたわけではない。ギリシア語、漢語と並ぶ古典語の位置が、もう少し広くこの言語にも認められてよいように思うがどうであろうか。

話は再び転じて、パーニニにもどる。最近のことであるが、新宿の紀伊國屋の本棚の前を散歩していて、私は、パーニニの『アシュタハディヤイー』の新訳本を見つけた。新訳といっても、残念ながら、日本語訳ではなくて、英訳である。この本を見つけたのが、実は本稿を書く機縁になってくれたのだが、それを見て私は言語学が歩んできた長い歩みを感じ取ることができた。言語学は、プラトンに始まるのではなく、ましてヤソニール

などに始まるのではなく、パーニニに始まるのではないだろうか。と、言うわけで、これはパーニニ及びそのはるかなる系譜の宣伝文書的性格をもつ。

予めお断りしておくが、私は専門に言語学をやっている人間ではない。従って、言語「学」に関する万遍な知識を有しているわけでもなく（もともと専門家と称する人でもそうではあるまいと思うが）、言語「学」というものが持っている「学」への自閉症的な傾向はあまり好きではない。私の関心は、むしろ、言葉そのもの、つまり麗わしの女神サラスヴァティーの方に向かう。

そういうわけで、私は言語学の本はあまり読まない。読まないけれども、それには実は例外がある。比較言語学に関する本は別だ。特に、一九世紀ヨーロッパに生まれた印欧語を中心とする比較言語学には、発見の喜びというものが充満していて、素人でもその発見の喜びに立会っていると、つい興奮してしまう（もちろん知的にだ）ようなところがある。そこには、確かに幾分かは、反時代的なものもつ魅力と、反時代的な所作のもつ快楽が加わっているかもしれない。しかし、私は、比較言語学

の近い将来の大きいなる復権をひそかに予想している。サ  
ラスヴァティーの骸骨を抱いているばかりでは満足でき  
ない日がやがてやってくるだろうと思っている。

私がパニーニの『文典』の話を始めたのは、だから、  
何もサンスクリット学の話をしようがためではない。そ  
うではなくて、この書物が遠い震源地となつて、四方に  
広がった地震波の後世に現われた余波について書きたい  
のだ。

その余波の一つは、ほかならぬ比較言語学であり、も  
う一つは仏教(特に密教)とともにわが国にも九・十世  
紀に伝来された悉曇(シットタンと読む)学である。

比較言語学はライプニッツの先駆的な仕事はあるが、  
主として一九世紀ヨーロッパの産物である。そしてそれ  
はまた、現代言語学の出発点でもあつた。よく知られて  
いるように、現代言語学の祖とされるソシュールも、ボ  
ドゥワン・ドゥ・クルトゥナーも、そしてあのブルーム  
フィールドでさえ印欧語比較文法の土壌から育つたのだ。  
一方、悉曇は仏典に使われるサンスクリット語の文字・  
音韻学習の必要からわが国においては、空海以来、近世  
に至るまで主として真言・天台の学僧を中心に学習され

てきたが、その一方で近世国語学形成に大きな役割を果  
たした。悉曇学を本格的に日本に将来した空海は、イン  
ド言語学のはのかな香りを日本に運びこむことによつて、  
日本に言語学的反省の種を蒔いたのだ、と言えるかも知  
れない。

それはともかく、比較言語学にしる、悉曇学の内部に  
醸成された国語学の萌芽にしる、言語に対する自覚的な  
反省意識の出現である点において通ずるところがある。  
それにまた、異なつた言語の比較という方法上の問題意  
識においても似た点をもつている。

現代言語学の歴史が、一八世紀末のいわゆる「サンス  
クリット語の発見」に淵源することは、どの言語学史の  
本にも書いてあることだから、いまさら説明の要もある  
まい。しかし、サンスクリット語が整理されないままの  
写本の集まりとして提供されたのであれば、一九世紀に  
あれほどの隆盛を見せた比較言語学の学問としての組織  
化は、もう少し緩やかなものであつたかも知れない。そ  
れが、あれほどに急速に確立されたについては、素材と  
素材を扱う方法が同時に提供されたのだということ、つ

まり、サンスクリット語が既にみごとに精密に体系化され、記述されていたということを無視してはならないだろう。

さらに、ソシュールの学位論文「インドロップ諸語における母音の原初体系に関する覚書」も、パーニニが定式化しておいた母音組織と「母音階梯」概念のある徹底した応用ではなかっただろうか。いずれにしろブルークマン等の青年文法学派に至る比較言語学の蓄積がなければ、ソシュールは存在しえなかったことは間違いないことだ。

確かに比較言語学は、一九世紀の知的情熱であった歴史主義に引かれる形で、言語の通時的側面により多くの関心を示してはいた。しかし、その歴史主義的目論見は、究極するところ、印欧祖語なるものの再構成というよりもむしろ創作にむかっただのである。それは、歴史的源泉としてよりも、むしろ、あらゆる言語（少なくともインドロップ諸語族に属するあらゆる言語）の最深層に位置するプロト言語（それは一種の基本語彙の、実体化されない意味要素の集合なのだが）として構想されていたものであった。このプロト言語に、個々の生成規則を

適用すれば、現象的レベルにある各言語は余す所なく記述されるはずであったのだ。つまり、現象的歴史的世界が生まれてくるはずであった。このように見れば比較言語学は、壮大な夢の構想であったし、精神のユートピアへの回帰であったのだが、それはパーニニがインドの言語に適用した方法の、印欧語族全体への、さらには言語全体への応用であった。

さらに視野を広げて見るならば、「サンスクリット語の発見」以後の比較言語学の急速な展開は、言語学とか文献学という専門領域ばかりでなく、一九世紀ヨーロッパの知の在り様全体に微妙な影響を与えている。それが単なる「学」ではなく、あるユートピアへの夢を内包していたことを考えれば、これも当然のこととして納得できよう。最も顕著な例を一つだけ挙げるならば、比較文法（当時はこう呼ばれていた）から発せられる磁力に引きつけられる形で、詩の言語のそもその起源について深い考察をめぐらせたマラルメがいる。当時の比較言語学的磁場を無視してマラルメを語ることはできないだろうと私は思う。

一七八六年二月二日のウィリアム・ジョーンズのアジ

ア協会の講演をもって、比較文法の始まりとするのは、今では言語学史の常識である。ということ、この日が現代言語学の始まりであったということでもある。それ以後、ヨーロッパを中心に展開された比較言語学の歴史を知るには、ペデルセンの名著の翻訳がある。他に手軽なのは、岩波新書に収められている風間喜代三の『言語学の誕生』であろう。

比較文法の旗手たち、ポップ、シュライヒャー、マックス・ミューラーなどの著作は日本語では読めない。ついでながら、わが国の仏教学を根底から革新することになるサンスクリット文献学は、マックス・ミューラーから南条文雄を経て明治のわが国に導入されたものである。悉曇学の伝統と比較文法の系譜がその時点で合流することになる。

比較文法の中から生まれた言語学者で、現在もその著作が読むに値する何人かの人を挙げれば、まず筆頭にはソシュール。その前にはホイットニーとブレアル。同時代にヘルマン・パウエル、レスキーン、ブルークマン等の青年文学派の面々、少し後にはメイエがいる。バンヴェニストもこの系譜に属する。ブレアルは比較言語学の成

果の上一般言語学を構想したが、その構想を実現したのがバンヴェニストだといってよいかも知れない。少なくとも彼の『一般言語学の諸問題』二巻は、豊富な比較言語学的知見に基礎づけられている。

パニーニから流れ出した大きな流れの糸ほどに細い支流である悉曇学は、仏教とともに中国から日本に伝えられた。法隆寺に伝わる般若心経の貝葉写本は、小野妹子将来の伝説を有するものであるが、サンスクリット写本として世界最古のものだ。悉曇とは、梵字の組織と読み書きに関する知識をいうものであるが、それが何故仏教に関係するかと言えば、仏典には音訳された梵語が多く含まれており、それらを正しく読み、理解するためには梵字・梵音の知識が必要だったからである。

特に真言・タラニをその宗教思想の中心に据える密教においては、悉曇の知識は不可欠のものであった。空海の『真言宗所学経律論目錄』には、「梵字悉曇章」を含む四十一巻の梵字テクストが指定されているのが、その明かな証拠である。従って、日本の悉曇学も、空海の密教導入とともに本格的に始まると考えてよい。事実、空

海の将来した智廣の『悉曇字記』という本が、以後、日本悉曇学の教科書となるものであるし、空海以後、円仁ら入唐八家のもたらした梵夾（サンスクリット原典）が、日本悉曇学の基礎資料となる。

悉曇そのものは密教僧たちの予備的な学習階梯に過ぎなかったが、平安期には安然、明覚などの何人かの優れた悉曇学者を生み出す。彼らの著作のなかには、梵字・梵音に日本語の音韻を比較するということが既に行なわれているし、体よりも重要なものは、それを通じて現在われわれが使っている五十音図の音韻組織が徐々に自覚されていったということである。つまり、梵字研究が国語音韻研究の基礎になったのである。この系譜は、浄蔵・契沖を通じて、江戸時代の国学へとつながっている。ちなみに浄蔵には『悉曇三密鈔』の著作があり、彼は悉曇学における契沖の師であった。

パーニニの余波が日本では、文字と音韻の側面に限られて、統辞論・語彙論に至らなかつたのは事実であろうが、それでも悉曇章を通じてわずかに伝えられたインド言語学の香りのようなものが、無視しえない影響をわが国語学に与え続けたということになろう。

悉曇学の歴史を跡づけた著作はほとんどない。その意味で、宗派的関心にもとづくものではあるが、田久保周譽の著作は貴重である。そのほか、国語学史、日本語音韻史を扱った著作には、必ずしも体系的ではないが、悉曇学の系譜に関する言及が必ず含まれている。築島裕のUP選書に収められた『国語の歴史』あたりが手ごろだろう。

（追記）本稿の機縁になってくれた『アンユタールアディヤーイー』の新訳本を参考までに記しておく。それが礼儀というものであろう。

Ashtadhyayi of Panini, translated by Sumitra M. Karte (University of Texas Press, 1987)

### ●文献表

- 1 パーニニ、ヴェーダ及びインド思想（言語学）について
- 1 中村元『インド思想史』（岩波全書）
- 2 ルヌー・フィリオザ『インド学大事典』山本智教訳（金葉舎）

- 3・辻直四郎『インド文明の曙』(岩波新書)
  - 4・ゴンダ『インド思想史』(鎧淳訳 冨山房)
  - 5・早島鏡正『インド思想史』(東大出版会)
  - 6・岩波講座『東洋思想』第五卷「インド思想1」(岩波書店)
  - 7・ルヌー『インド教』(クセジュ文庫 白水社)
  - 8・世界文学体系『インド集』(筑摩書房)
  - 9・辻直四郎『リグヴェーダ讃歌』(岩波文庫)
- 二 玄奘について
- 1・玄奘『大唐西域記』(水谷真成訳 平凡社)
  - 2・前嶋信次『玄奘三蔵』(岩波新書)
  - 3・中野美代子『三蔵法師』(集英社)
  - 4・陳舜臣『天竺への道』(朝日新聞社)
  - 5・桑山正進・袴谷憲昭『人物中国の仏教玄奘』(大蔵出版)
- 三 サンスクリット語について
- 1・辻直四郎『サンスクリット文法』(岩波全書)
  - 2・同 『サンスクリット読本』(春秋社)
  - 3・ゴンダ『サンスクリット語初等文法』(春秋社)
  - 4・岩本裕『サンスクリット文法綱要』(山喜房)

#### 四 比較言語学の歴史について

- 1・風間喜代三『言語学の誕生——比較言語学小史——』(岩波新書)
  - 2・ウオーターマン『現代言語学の背景』(上野直藏・石黒昭博訳 南雲堂)
  - 3・ペデルセン『言語学史』(伊東只正訳 こびあん書房)
- 五 比較言語学について
- 1・高津春繁『比較言語学』(岩波全書)
  - 2・同 『印欧語比較文法』(岩波全書)
  - 3・泉井久之助『ヨーロッパの言語』(岩波新書)
  - 4・同 『言語の世界』(筑摩書房)
  - 5・同 『印欧語における数の現象』(大修館書店)
  - 6・服部四郎『言語の系統と歴史』(岩波書店)
  - 7・風間喜代三『印欧語親族名詞の研究』(岩波書店)
  - 8・村山七郎『日本語系統の探求』(大修館書店)
  - 9・同 『日本語の誕生』(筑摩書房)
  - 10・日本語の系統を考える会編『日本語の系統 基礎論文集1』(和泉書院)

11・鈴木孝夫『ことばと文化』(岩波新書)

12・イエスベルセン『言語——その本質・発達・起源』(三宅 訳 岩波書店)

13・レーマン『歴史言語学序説』(松浪有訳 研究社)

14・ロックウッド『比較言語学入門』(永野芳郎訳 勁草書房)

15・マルティネ『近代言語学体系』(泉井久之助監訳 紀伊國 屋書店出版部)

16・メイエ『史的言語学における比較の方法』(泉井久之助訳 みすず書房)

17・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』(岸本通夫監訳 みすず書房)

18・同 『インドヨーロッパ諸制度語彙集』上・下(蔵持不三也ほか訳 言叢社)

19・パウエル『言語史原理』(福本喜之助訳 講談社学術文庫)

20・ブラッドリ『英語発達小史』(寺澤芳雄訳 岩波文庫)

## 六 ソシユールについて

1・ソシユール『一般言語学講義』(小林英夫訳 岩波書店)

2・同 『言語学序説』(山内真美夫訳 勁草書房)

3・丸山圭三郎編『ソシユール小事典』(大修館書店)

4・丸山圭三郎『ソシユールの思想』(岩波書店)

5・同 『ソシユールを読む』(岩波書店)

6・カラー『ソシユール』(川本茂雄訳 岩波書店)

7・ケルナー『ソシユールの言語論』(山中桂一訳 大修館書店)

8・ムーナン『ソシユール』(福井・伊藤・丸山訳 大修館書店)

## 七 マラルメについて

1・菅野昭正『ステファヌ・マラルメ』(中央公論社)

2・『鈴木信太郎全集』(大修館書店)

3・『世界批評大系』第2巻「詩の原理」(筑摩書房)

4・サルトル『マラルメ論』(平井・渡辺訳 中央公論社)

5・ブランショ『マラルメ論』(粟津則雄・清水徹訳 筑摩叢書)

6・マラルメ『詩と散文』(松室三郎訳 筑摩叢書)

## 八 悉曇学・国語学史について

1・田久保周譽『批判悉曇学』(真言宗豊山派宗務所)

2・同 『梵字悉曇』(平河出版社)

3・吉田東朔・築島裕『国語学史』(東京大学出版会)

- 4・重松信弘『国語学史綱要』（武蔵野書院）
  - 5・築島裕『国語の歴史』（UP選書 東京大学出版会）
  - 6・国語学会編『国語学史資料集』（武蔵野書院）
  - 7・同『国語学辞典』、『国語学大辞典』（東京堂）
  - 8・林巨樹・池上秋彦『国語史辞典』（東京堂）
  - 9・佐藤喜代治編『国語学研究事典』（明治書院）
  - 10・『大正新修大蔵経』第八四卷（日本悉曇学の主な著作を収める）
- 九 空海について
- 1・『弘法大師空海全集』（筑摩書房）
  - 2・『弘法大師著作全集』（山喜房）
  - 3・『弘法大師と現代』（筑摩書房）
  - 4・『空海』（日本名僧論集3 吉川弘文館）
  - 5・渡辺照宏・宮坂有勝『沙門空海』（筑摩叢書）
  - 6・宮坂有勝『密教世界の構造』（筑摩叢書）
  - 7・同『空海——生涯と思想』（筑摩書房）
  - 8・同『密教思想の真理』（人文書院）
  - 9・松長有慶『空海——無限を生きる』（集英社）
  - 10・山本智教『空海上人伝』（朱鷺書房）
  - 11・上山春平『空海』（朝日評伝選 朝日新聞社）

- 12・『空海の人生と思想』（講座密教3 春秋社）
- 13・『空海入糖』（美乃美）
- 14・梅原猛『空海の思想について』（講談社学術文庫）
- 15・司馬遼太郎『空海の風景』（中公文庫）
- 16・陳舜臣『曼陀羅の人』（TBSブリタニカ）
- 17・稻垣直美『空海』（徳間文庫）
- 18・山折哲雄『日本仏教の源流』（講談社学術文庫）
- 19・『空海密教のすべて』（朱鷺書房）
- 20・勝又俊教『弘法大師の思想とその源流』（山喜房）
- 21・中野義照『弘法大師研究』（吉川弘文館）

竹内信夫（たけうちのおお）

一九四五年生まれ。東京大学大学院博士課程終了。現在、東京大学教養学部助教授。

訳書にH・メシヨニック『詩学批判——詩の認識のために』（未来社）、M・バンゲ『自死の日本史』（渋沢・クロードル賞受賞）、『テキストとしての日本』（いずれも筑摩書房）がある。

## 出版販売の裏街道

村上 信明

人文会の弘報委員から「今回が最後だから取材で拾いたい話を提供しろ」との達しがあった。いい話とは、人文会の会員社および特約店、準特約店にとってためになる話、品位のある人文会はごうはいわなかったが、はっきりいうと、取っておきの儲け話のことだ。

正直にいうと困った。いい話はそうは転がっていない。とくに「正常ルート」と呼ばれる取次―書店ルートでは、過剰供給、過剰返品、書店乱立、収益率低下などマイナス材料山積の状態だから、いい話にはめったにありつけない。ときたまいい話もあるが、それは「新文化」に既に載せているので、取っておきの儲け話といったものはない。もともと儲け話は、通常の商売の裏道にあって、当事者がそれを表に出したりはしないものである。

明治・大正期に取次業を営み、のちに誠文

堂新光社を興した故・小川菊松さんの著書に『出版興亡五十年』（一九五三年刊、絶版）という出版流通史研究には欠かせない名著がある。この本は、実は私の近著『出版流通図鑑』の取材先を見つける手掛りとして大いに役立つが、そのなかで著者は戦前の出版社、取次、書店が、裏道でうまい商売をやっていたことを随所に明かしている。

たとえば、取次時代の著者が廃棄される和紙印刷の教科書を反故値で買い込んで、裏返して大福帳に作って売った話。講談社がソツキ本業者四社と契約し、返品雑誌が月遅れ雑誌として露店に並ぶことを承知で見切り売りしていた話。大取次・東京堂の大野孫平（当時専務）が著者らと別人名義の古雑誌取扱い店を開いて稼ぎ、その金で同業者への金融もやっていた話。ソツキ業者が大手版元・博文

館の元編集長を抱えて出版に乗り出し、大成した話。小金を貯めた中堅出版社が出版仲間に高利で貸して儲けた話。これらを著者の経験を交えて、「裏道商売というものは、どこの世界でも、案外面白く、且つ有利で、こっそりとタップリ儲かるものである」と述べている。

人文・社会科学書の裏道商売にちなんでいうと、小田切進編『新潮社八十年図書総目録』に次のような記述がある。「……社会情勢の変化に伴い社会主義思想の書物が数多く刊行されたが、官憲の断圧を避ける秘密出版、非合法の販路を採るものでも二千―三千部、場合によっては一万、二万部を捌き、大正期末年には社会主義思想が営利出版として成立する」。

みんな結構うまくやっていたわけである。こうした話は、定価販売は始まっていたが、法的に再販制度が確立していない時代のことである。しかし、商売の裏道にこそ儲けがあるというのは、時代状況は変わっても、いまに通じる真理であると思う。

自著の宣伝めいて恐縮だが、『出版流通図鑑』の取材で、実名は出さないという条件で「裏街道」の出版社に企画から販売までの手法を聞いたことがある。

「企画内容は誰でも手軽に読め、実用的なものを原則とし、一応定価は二千四百円とか三千円と付けても、一〇〜一五％の割引特価で売って割安感を出すのがコツ」で、その出版社は外交販売員をつかった職域直販で一点数万部を捌いていた。「表街道」では、「本は安くしても売れないものは売れない」という定説があるが、安く見せて売る方法もあるんだなあと感じ入った。

後日談だが、その出版社が類似企画を取次ぐ書店ルートに出しているのを見た。定価千五百円とあった。読者が「裏街道」と異なるのでまったく心配ないのだという。職域直販業

者やそれを受け入れる企業や団体によると「書店に買いに行かない、潜在読者」は、われわれの想像以上に存在するようだ。これは、有力書店の書籍宅配便を利用する読者が、交通至便の大都市内に予想以上に多くいたこと、どこか相通じるところがある。

私自身の営業体験でも似たようなことがあった。以前、私のいた出版社で歴史関係の地味な季刊誌を出した。発行部数二千五百部程度だったが、これが店頭ではなかなか売れず返品、配本部数はどんどん減った。そこで担当編集者と一緒に学会の大会会場に持ち込んで、呼び込み販売を試してみた。すると、返品で汚れたその残本が、まさに飛ぶように売れて、在庫一掃となった。

客は圧倒的に学生。「せめて大学生協並みに一五％ぐらい引いてよ」という学生たちに予約購読をすすめたが、「その都度買うのは面倒」「史蹟調査で家にはいない」「年一回の大会でまとめて買うからいい」と受けつけてくれなかった。大会会場では各研究グループの調査報告書が販売されていて、学生たち

は主にそれを買いに来たという。当日、それが数万円分の資料を買ひ込んでいるのを見て、目を見張ったものである。翌年、親しい書店に代行販売してもらおうと、学会に打診すると「学術研究の向上のため発行者による販売は認めるが、営利を目的とした小売業者による販売は認めていない」とのことだった。

これにも後日談がある。その会場で神田の古書店の人たちを何人か見かけたが、しばらくして当の古書店を覗くと、会場で販売されていた研究グループの調査報告書が二倍から三倍の値付けで棚に収まっていた。「利は元があり」とはこのことだと、えらく感心してしまった。

「表街道」は、公平的、平等的、安定的な営みを掲げて発展してきたが、一方の「裏街道」も、手練手管を用い、危険を背中合わせにしながら市場を拓いてきた。両者を比べてみて、品位は「表街道」が勝るかも知れないが、商売のうまさという点では「裏街道」に軍配が上がる。

（「新文化」記者）

# 新・人文書セットについて

東京大学出版会 竹内康一

人文図書の普及・販売促進活動の充実に、人文  
会が結成されて今年で二十年を迎えました。この間、  
特選人文書セットも、少しずつではありますが、書店  
さんにとって魅力的で販売に実際に役立つセットをモッ  
トに工夫を重ねてまいりましたつもりです。

昨年夏に、都内・近県のセット店さんを販売企画委員

会のメンバーが訪問し、人文会セットについて、ご意見  
を直接お聞かせいただきました。その前年には、全国の  
セット店さんにアンケートを行ない、ご希望、ご提案な  
どを頂きました。

アンケートの結果、ご意見等を総合しますと、従来の  
人文図書セットは、取次店さんからの送り付けではなく、

## ミュンヘン キャバレー 政治 1900~1923

R・E・サケット 大島かおり訳 政治的激動期のドイツで人々の心を魅了した大衆芸人の芸を積み解く。 2000円

## ケンブリッジの エリートたち

R・ディーコン 橋口稔訳 哲学者からスパイまで、世界最高の知識人がつどったある「秘密会」の謎を追う。 2800円

## 演劇都市と身体

〈ヨーロッパの視行〉 田之倉稔 18世紀のヴェネツィアから現代まで、イタリア精神史の深部を歩きつつ、都市における身体表現を探る。 2800円

## 「宗教時代」

米山義男編 いま日本人の心に何が起っているのか？ 22歳から78歳まで47人の人々が語る「幸福って何？」。 1900円



晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12  
電話255-4501

すべての書店さんが自主仕入で、売行きはまずまずで、今後も毎年入替えを希望する書店さんが圧倒的に多いことがわかりました。人文会セットをどのように見ておられるかといえますと、

- ①50坪規模の書店にとって大変重宝なセットである。
- ②人文会セットを置いて店の核にしたい。
- ③版元一社一社の常備は置けないが、各社の発行良好書がコンパクトに組まれていて大変良い。
- ④人文会セットを入れたお蔭で人文会の版元と付き合いができるようになった。
- ⑤専門書を置きたいが、スペースがないので、人文会セットは、打ってつけだ。

など多くのメリットを認めていただきました。

人文会は22社の集まりの会です。一社ごとに販売政策、常備の考え方、出版内容等が違いますが、共通しているのは、各社の常備店はある程度専門書を置ける大型店が中心で、セット店さんに人文会の版元の常備が入っていることは、ごく少ないと思います。したがって、立場こそ変われ人文図書セットは、書店さんにも版元にもお互いに必要なものであることは間違いないと思われます。さて、今年度分の人文図書セット搬入については、すでに完了しております。今回、日販・大阪屋さんについては時間の都合で従来通りのセットで出荷させていただきました。東販さんについては、今までの人文会セットと東販企画のベストセットを一本化し、より効果的で、書店さん、読者の皆様にとってさらに魅力的なセットに

なるように企画いたしましたので、ご案内申し上げます。  
新しいセットの内容はつぎの通りです。

一、従来の人文会セットと東販企画「人文科学書ベストセット」をまとめ、新たに東販・人文会合同『第一回人文科学書ベストセット』として企画いたしました。人文会22社と、人文会以外8社の合計30社が、特に厳選した商品群で、しかも基本セット・出版社別選択セットの2種類で一層の内容充実を図っております。

具体的には、

●セット種類〔基本セット〕 30社 80点80冊

〔選択セット〕 29社 一社3点〜12点

●条件 12ヶ月長期委託 書店様 64年4月30日返品

64年5月15日請求

●拡材 統一オビ、特製補充カード

※出版社別選択セットは、基本セットとの商品の重複はなく、基本セットをお申し込みいただいた書店さんに限り、版元を選択してお申し込みいただけるものです。選択セットのみのお申し込みはできません。

今まで、人文会セットと東販ベストセット両方に同じ商品を入れた版元もありましたので、今回の合同企画に

よる2セット化で、取次店さん・書店さん、そして版元と三者とも相当なメリットが期待されると思われま

す。また、今回の合同企画によるセットは、各社の商品が厳選され、それに人文会以外の版元の商品がプラスされたことによりセット内容に幅がでて魅力的なセットになったと思います。今後はさらに版元数が増えて、このセットが文字通り人文図書セットの基本の基本であると言われるまでに成長できればと思います。私も版元といたしましても、ともすれば自社の立場のみを考えがちな狭い視点を離れ、出版界という大きな視野に立って、人文図書の売上増大をはかり、また読者への良書の普及を工夫して参りたいと存じております。

日販・大阪屋さんにつきましても、今回は実現できませんでしたが、来年度からは新セットを実施できるように現在準備検討中でございます。

最後に、書店・取次店の皆様には今後とも忌憚のないご意見・ご提案をお願いし、人文図書の普及・販売促進に向かって、一歩一歩進んでゆきたいと存じます。よろしく、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

〔弘報委員会より〕

「人文会ニュース」51号をお送りします。

前号でもお知らせしましたが、本年は人文会結成二十周年にあたります。本誌は前号で50号となり、ひと足さきにひとつのフシ目を迎え、本号でまた新たな一步を踏みだしたこととなりますが、会全体としては、現在、取次・書店の方々はもとより一般読者をもターゲットにいれたハンドブックとして「人文書マニュアル」(仮)を鋭意製作中です。夏ごろには完成の予定ですが、A5判三〇〇ページとかなかなかの大冊であり、これ一冊で「人文書」の大きな流れがつかめ、また、品揃えの基本になるようなブックリストを収録するので、おおいに御参考になるはずですが、いずれくわしく御案内させていただきますが、御期待ください。

また、二十周年記念としてさまざまなイベントも考えておりますので、御協力のほどよろしくお願い申し上げます。

\*

本誌がお手元にとどくころには、5月の総会を経て新しい弘報委員会が発足しているはずですが、したがって、本委員会としては最後の「人文会ニュース」をおとどけすることになります。この二年間、さまざまなかたちで御執筆くださった方々はじめ、御意見・御批判等をお寄せくださいました方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げたいと思います。

(文責・西谷)

# 人文会会員名簿

(〒113-91 東京都文京区本郷局私書函89号)

1988. 5. 現在

	社名	担当者	〒	所在地	電話	FAX
	青木書店	古川 清	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481	292-0475
	大月書店	原田 敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	橋本 盛作	102	千代田区九段北1-8-2	230-2510	265-7767
	紀伊國屋書店出版部	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘5-38-1	439-0125	439-1094
	勁草書房	氏家 富男	112	文京区後楽2-23-15	815-5277	814-6854
	社会思想社	渡辺 和彦	113	文京区本郷1-25-21	813-8105	813-9061
	春秋社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611	253-1384
幹事	晶文社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4501	255-4506
幹事	誠信書房	濱地 正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666	945-8880
幹事	創元社	重光 義彦	162	新宿区山吹町77	269-1051	269-1092
	筑摩書房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町2-8	291-7651	295-0220
	東海大学出版会	岡田栄三郎	160	新宿区新宿3-27-4 新宿東海ビル	356-1541	341-1833
会長	東京大学出版会	中平千三郎	113	文京区本郷7-3-1	812-2111	内7955
幹事	〃	竹内 康一	〃	〃	811-8814	812-6958
幹事	日本評論社	後藤 光行	170	豊島区南大塚3-10-10	987-8621	987-8590
	福村出版	土屋知可夫	112	文京区小石川1-3-17	813-3981	818-2786
	平凡社	須田 康昭	102	千代田区三番町5Kビル	265-4492	263-9333
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見2-17-1 法政大学構内	237-1731	237-8899
代表幹事	みすず書房	相田 良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131	818-6435
幹事	未来社	西谷 能英	112	文京区小石川3-7-2	814-5521	814-8600
	雄山閣出版	武 一雄	162	新宿区白銀町20	266-8481	266-8444
	有斐閣	佐藤 進	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811	262-8035
	吉川弘文館	川越 重行	113	文京区本郷7-2-8	813-9151	812-3544

販売企画委員会 ◎竹内 ○古川 土屋 須田 佐藤 川越

弘報委員会 ◎西谷 ○原田 橋本 渡辺 澤畑

調査・研修委員会 ◎萬洲 ○市川 氏家 岡田 武

20周年記念委員会 ◎濱地 ○佐久間 ○菊池

◎印は委員長 ○印は副委員長

# 法政大学出版局

カブフェレ

## うわさ

もつとも古いメディア

古田幸男 訳 うわさはいつ生まれ、  
どのように流れ、誰が伝播するの  
か、どの身近にありながら得体的  
な現象を豊富な例によって分析し、  
日常生活における役割を解明。2800円

F.ガタリ

## 分子革命

欲望社会のミクロ分析

杉村昌昭 訳 現代資本主義の機能分  
析から国家・社会のミクロ政治学ま  
で、〈分子革命〉を通した新しい〈社  
会主義〉社会への運動理論の定立を  
めざすそのパロールの集成。2800円

102 東京都千代田区富士見2-17  
☎03-237-1731 振替東京6-95814

## 日常図鑑

批評の  
クロナロジ

● 柏木 博 著

テクノロジーとメディアが侵食した現代社会をサイエンス的視点から分析し、日暮性に溢れる欲望と消費の記号学を明晰に読み解く気鋭の最新著作

## 悲しきブーメラン

アポリジニーの  
悲劇 1600円

● 新保 満 著  
今年建国200年を迎えたオーストラリアの先住民たちの暮らしと文化が白人の現代文明社会に呑み込まれていく悲話

## イヴの隠れた顔

● N.E. サードウェイ 著  
村上真司 訳 3000円

『ラブ世界の女たち』女児の割礼をはじめアラブ社会の中でタブーとされてきた問題を上げ女の経済的・性的抑圧を告発する女性解放の書

東京文京小石川3-7 未来社 ☎(03) 814-5521

● 民間療法の実例と実態 ●

## 医の民俗

日本の民俗学  
シリーズ⑦

根岸謙之助 著

● 四六 1800円 ●

● 元号法を知るに最適 ●

## 年号の歴史

● 雄山閣  
ブックス②

所 功 著

● A 5 2300円 ●

雄山閣

千代田区富士見2/振替東京3-1685

## 丸山真男論ノート

笹倉秀夫 作品群から重層的思考の構造を析出し、へ自由の  
永久革命者の像を構築。初の本格的な丸山真男入門。 3000円

## 読書の現在

《みすず》編集部編 80年代、本はどう読まれたか? 328頁  
が想像力と知性の世界へと誘う刺激的ブックガイド。 3000円

## ロラン・マルヴィーダ往復書簡

若き日のロランとニイチェラと親交の深かった女性マルヴィ  
ーダとの190通の心の交感(2巻・1巻)。南大路雄一 訳 3000円

## 私の研究遍歴

伏見康治者 著 8 (第8回)  
現象の背後に数理の論理を読み取る物理学者の創造の世界。  
科学エッセイの集成。(全8巻完結) 内山龍雄解説 3000円

東京文京本郷  
3丁目17-15

みすず書房

[シリーズ]  
地球の歴史をさぐる

— 第 I 期完結! —

- ① 大気のおいたち 秋山雅彦著 一四〇〇円
- ② 火山の一生 松本健夫著 一七〇〇円
- ③ 石炭ものがたり 相原安津夫著 二〇〇〇円
- ④ サンゴ礁のなぞ 沖村雄二著 一六〇〇円
- ⑤ ヒマラヤはなぜ高い 在田一則著 二〇〇〇円

青木書店

東京神田神保町1 TEL 03 (292) 0481

いまマルクスが  
面白い

現代を読み解く事典

いいだもも・伊藤誠・平田清明編  
混迷と危機の世紀末。いまマルクスが生きていたら何を語るだろうか。62の事典的テーマによって現代の諸現象を解説する。〔有斐閣新書〕850円

図解  
技術の考古学

潮見 浩著〔有斐閣選書〕1200円

原始・古代の製作技術(技法)を各素材ごとに多数の図版を使って解き明かし、復元を試みた著者の、積年の研究を集成した待望の書!

東京・神田 有斐閣 03/265  
神保町 -6811

核抑止か  
核廃絶か

非核の政府を  
求める会編

核抑止の論理に正面から挑み多角的に批判し  
核廃絶の道に対置する力作。

「核戦争の恐怖によって世界戦争が抑止されている」  
「核戦力への均衡が崩れば平和が脅かされる」  
「この論理こそが、核軍拡を正当化するものだった。」

46判カバー  
定価1200円

大月書店 電話03  
2-11-9 813-4651(代)

歴史知識の源泉

国史大辞典

全15巻  
刊行中

- 第1巻 (あーい) 二二〇〇円
  - 第2巻 (うーお) 二二〇〇円
  - 第3巻 (か) 二二〇〇円
  - 第4巻 (きーく) 二二〇〇円
  - 第5巻 (けーこ) 二二〇〇円
  - 第6巻 (こまーし) 二四〇〇円
  - 第7巻 (しなーしん) 四〇〇〇円
  - 第8巻 (すーたお) 四〇〇〇円
  - 第9巻 (たかーて) 63年秋刊予定
- 四六倍判/平均二二〇〇頁

吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2/電03-813-9151

## 御茶の水書房

あごら叢書

### バルトーク音楽論集

バルトーク著・岩城肇編訳/定価3400円  
今世紀最大の作曲家の一人バルトークの音楽論を集成した話題の本。

御茶の水選書

### 現代資本主義のトポロジー

高橋洋児著/定価2000円

物象化論に独自の道を開いてきた著者が、現代日本の社会状況に鋭く切り込む会心の批判集・現代社会論。

### 病める日本をみつめて

—人間解放と宗教の再生—

ルベン・アビト著/定価1400円

アジアは日本が身を正すための鏡である。非人間化した日本社会を凝視し、アジア民衆との共生を模索する。

東京・千代田・九段北1-8-2 ☎03(265)5746

## 未来の仕事

J・ロバートソン/小池和子訳 雇用から自身の仕事へ—  
脱産業時代の仕事・暮しを展望する。 24000円 千300

## 生命学への招待

森岡正博 人間へ非中心主義の視座から生命と科学と倫理をめぐる問題群に挑む。 23000円 千250

## 芸術としての身体

レヴィン他/尼ヶ崎彬編訳 現代芸術/美学に重要な問題を提起する舞踊・パフォーマンス・身体論。 22000円 千300

## オペラント心理学

岩本隆茂・高橋雅治 自発的行動の発現と変容を究明するオペラント心理学の日本で最初の概論書。 24000円 千300

東京文京区後楽2-23 勁草書房

振替東京 5-175253

## バイオコンピュータ

神沼二真+松本元=編

バイオ素子からニューロコンピュータまで、いま注目の人工知能計画の最前線の話題と今後の展望を解説 ●3000円

## 批評の機能

—ポストモダンの地平—

イーグルトン/大橋洋一訳 英国を代表する批評家が批評の社会的役割を問い、今日の<知>の課題を示す ●1800円

## 紀伊國屋書店

本店：東京都新宿区新宿3 ☎03(354)0131  
出版部：東京都世田谷区桜丘5 ☎03(439)0125

## 社会思想社

### 「会社本位国家日本」の背景を探る！ 企業事件史

奥村 宏  
佐高 信

●日本の経営のオモテとウラ

定価一三〇〇円

〈ゆりかごから墓場まで〉人間をとらえて離さない「会社本位」主義国家・ニッポンの背景には何があったのか。日本企業を成功に導いた原理とは何かを再考する。「会社とは何か？」

佐高 信 当世企業案内「教養文庫」●近刊

東京都文京区本郷1-25 ● ☎813-8105

# キャンパス・トピックス

こころ探し—入学から卒業まで  
神保信一編 就職、留年、恋愛、対人関係など大学生が抱える様々な悩みやこころの問題とそのアドバイスをイラスト入りでトピック風に紹介。1000円

# 図説 心理学入門

齊藤 勇編 人間の心のしくみや働きについての基本的な知識を現代心理学の新しい視点から図や写真でわかりやすく解説した入門書の決定版。1800円

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6  
TEL.03-946-5666

# トーマス・マン 望月市恵・小塩節訳 今世紀最大の夢のロマン ●全3巻・完結 ヨセフとその兄弟

## III 第四部 養う人ヨセフ

エジプトを養う人として高められたヨセフに、再会した老父ヤコブは、完成に十六年の歳月を費したトーマス・マンの壮大な叙事詩。邦訳五千枚の最終巻。6400円

既刊

I 序 曲 地獄めぐり  
第一部 ヤコブ物語  
第二部 若いヨセフ

II 第三部 エジプトのヨセフ  
■各6800円・菊判

東京神田 筑摩書房 小川町2

梅棹忠夫 編

日本史を独自の視点で読み解く  
国際派ビジネスマン必読の書

# 日本文明

B6判  
定価一三〇〇円

# 77の鍵

77のキーワードで解く、梅棹文明史

# 創元社

大阪市北区西天満1-4-2 ☎06-363-2531  
東京都新宿区山吹町334-11 ☎03-269-1051

# 文化のインターフェイス

## 越境・境界・界面

日本記号学会編 現代社会を読み解くためのキーワード「インターフェイス」をめぐって、哲学・思想・言語・科学基礎論・建築などさまざまな立場から記号的な分析を試みた論集。人間と機械の「境界面」を考える基礎資料である。2500円

語り—文化のナラトロジー—(記号学研究7)

日本記号学会編 語りと物語論を中心テーマに。2500円

民衆文化の記号学 先覚者  
ボガトウィリヨフの仕事

桑野隆著 民衆演劇の記号的な研究に焦点。2200円

東海大学出版会 東京都新宿区新沼3-27-4  
☎031-356-1541

非売品

昭和63年5月15日発行 年4回発行 第51号

発行所 人文会 みすず書房内

〒113 東京都文京区本郷5-32-21

(113-91東京都文京区 本郷局私書函89号)

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印